

津波被災 インドネシア・バンダアチエ

# 復興、防災に県人一役



被災地で現地当局者らと復興計画を検討する三松康道さん(左から3人目)＝5月、インドネシア・バンダアチエ(三松さん提供)



【東京支社】昨年十二月のスマトラ沖地震に伴う大津波で最大の被災地となったインドネシア・バンダアチエの復興計画に、盛岡市出身の三松康道さん(59)＝東京都文京区本郷、エコプラン代表取締役IIが防災計画アドバイザーとして参加している。バンダアチエは死者行方不明者二十万人以上の壊滅的な被害を受けており、その復興は世界的に注目されるプロジェクト。三松さんは「被災地のために力を尽くしたい」と知恵を絞っている。

復興計画は同国の国家として参加を求められ、毎月計画の原案を基に、四月現地に出向いている。月から日本の国際協力機構(JICA)が作成作業を進めている。JICAの作業チームは日本の共同企業体を中心に二十人。計画は土地利用、上下水道、道路交通など多方面にわたる。三松さんはまちづくりや防災の専門家で、防災計画の重要性からアドバイザーと

計画の原案を基に、四月現地に出向いている。被災地域は延長約10キロの海岸線から3-4キロ内

三松さん 盛岡出身 世界的プロジェクト参加

## 町づくりにも尽力誓う

スマトラ島西方沖地震、2004年12月26日、インドネシアのスマトラ島西方沖でマグニチュード9.0(過去100年で史上4番目の巨大地震)が発生。地震による大津波で死者行方不明者はインド洋一帯で日本人32人を含む30万人以上に達した。

陸の一角。特に海岸線から2キロの範囲は何も残っていない状態だ。一月にタイやマレーシアの被災地も視察した三松さんだが「バンダアチエは一般住宅の被害がひどい」と顔を曇らせる。

救いは現地の人々の明るさ。計画作りでは地元の方を集めることが不可

欠だが、人々は積極的に近寄ってきて「写真に撮ってくれ」とねだり、自ら被災状況を話し出す。「情報収集には事欠かなかった。彼らは陽気さや誇りを失っていない。こちらの方が勇気づけられた」。

主な防災計画は、中心市街地を3キロほど内陸に移転させ、マンクローブによる緑地帯を海岸線と内陸2キロ地点に二重に設置する。当初は海岸線から2キロ以内は居住させない方針だったが、住民の反対で希望者には居住を認めることになり、避難計画も新たな重要課題に浮上した。

津波の影響で官公庁の電算情報が失われた結果、区画整理に必要な土地の権利関係の確定も難題。反政府活動を警戒して外出には必ず護衛が付くなど、現地の複雑な政治情勢も影を落とす。

復興計画策定は九月末がめど。三松さんは「被災地のためになる計画を作る」と意欲。今月下旬から再び現地に向かう。